

22

鹿児島県の医療史について

園田 真也

園田病院

九州の南端、鹿児島（薩摩）は中央から離れているが、大陸に近く、その地政学的位置から独自の政治・経済・文化圏を形成してきた。また人間の営みに随伴する医学も周辺地域より様々な影響を受けながら独自の発展経過をたどってきた。時代の経過と発展経過をたどってみよう。

日本全体の医療を俯瞰すると、6～15世紀に中国医学の伝来、16～18世紀は後世派医学（金元医学の影響）、17～19世紀は古方派医学（古医方：中国伝統医学の日本化）、18世紀～西洋医学の流入などの流れが見えるが、鹿児島（薩摩）においては、13世紀までは資料があまり残っていない。

14～16世紀：熊襲・隼人などの蔑称で呼ばれ、中央政権にまつろわぬ民も中央から下向してきた島津氏を頭領にいただき、一時は九州全域を平定しそうな勢いまで発展する。薩摩は尚武の土地でもあり、戦乱が絶えない世の中で戦場の医術も発展したであろう事は想像に難くない。盲人の奏でる薩摩琵琶などは戦場の士気を鼓舞するものであった。

豊臣秀吉の九州攻めの後は薩摩・大隅・日向の3カ国の領地を安堵され、豊臣政権に与し、文禄・慶長の役では朝鮮出兵を経験する。その際、陶工を連れ帰り、医書を獲得する事で医術、産業の発展を果たす。またポルトガル人ザビエルやアルメイダの逗留などの史実があり、南蛮人との交流の中での南蛮医術の伝来も考えられる。

17世紀：明末の戦乱を避けて鹿児島に帰化した大陸人の中では医術を業とする者が出てきた。唐仁原・唐人町・高麗橋などの地名が残っており、大きなコミュニティを形成していたと考えられる。118回大会の会場予定地近くにも角三官という明人が住み着き、医業を行っていた。名前にもなむ三官橋という地名もあつたらしい。

18世紀：江戸幕府より琉球の統治をゆだねられた薩摩藩は、現地に代官を置き、琉球との交流を独占した。その中には人材交流があり、琉球人が薩摩に鍼などを含めた医術を習得に來たり、薩摩の医師が琉球の医師に口唇裂の治療を伝授してもらったりした。また藩医は京都・江戸などに遊学することで最新の医学情報を薩摩に届ける役割を担った。中央にて古医方学派を習得した医師が帰藩し、治療に辣腕をふるっている。温暖な気候を利用した菜園が藩内数カ所に設けられたのもこの時代である。

19世紀：世の流れが蘭学に傾く中、薩摩藩は積極的に長崎に人士を派遣し、医術、技術の習得を目指す。シーボルトの時代から精得館の時代まで多数の名前を門人帳の中に見いだすことができる。この人材が明治維新を支える原動力になった。

維新时期に入ると国内で率先して西洋医学を取り入れる。医学校の設置やお雇い外国人ウィリアム・ウィリスの事例などが好例である。

20世紀前半：有能な人士を中央に輩出した鹿児島は産業・医術においても停滞期を迎える。もとより生産性が高い土地でもないため、有為な人材は中央もしくは大陸を目指し、医師養成機関が無いため独自の医療の発展には冬の時代を経験する。医学部が創設されるのも第2次大戦後であった。

第2次大戦後：人材育成機関が整った今日、島嶼医学や亜熱帯医学などで独自の貢献を行っている。

本発表ではあまり現在まで語られなかった鹿児島県の医療史を取り上げてみたいと思う。